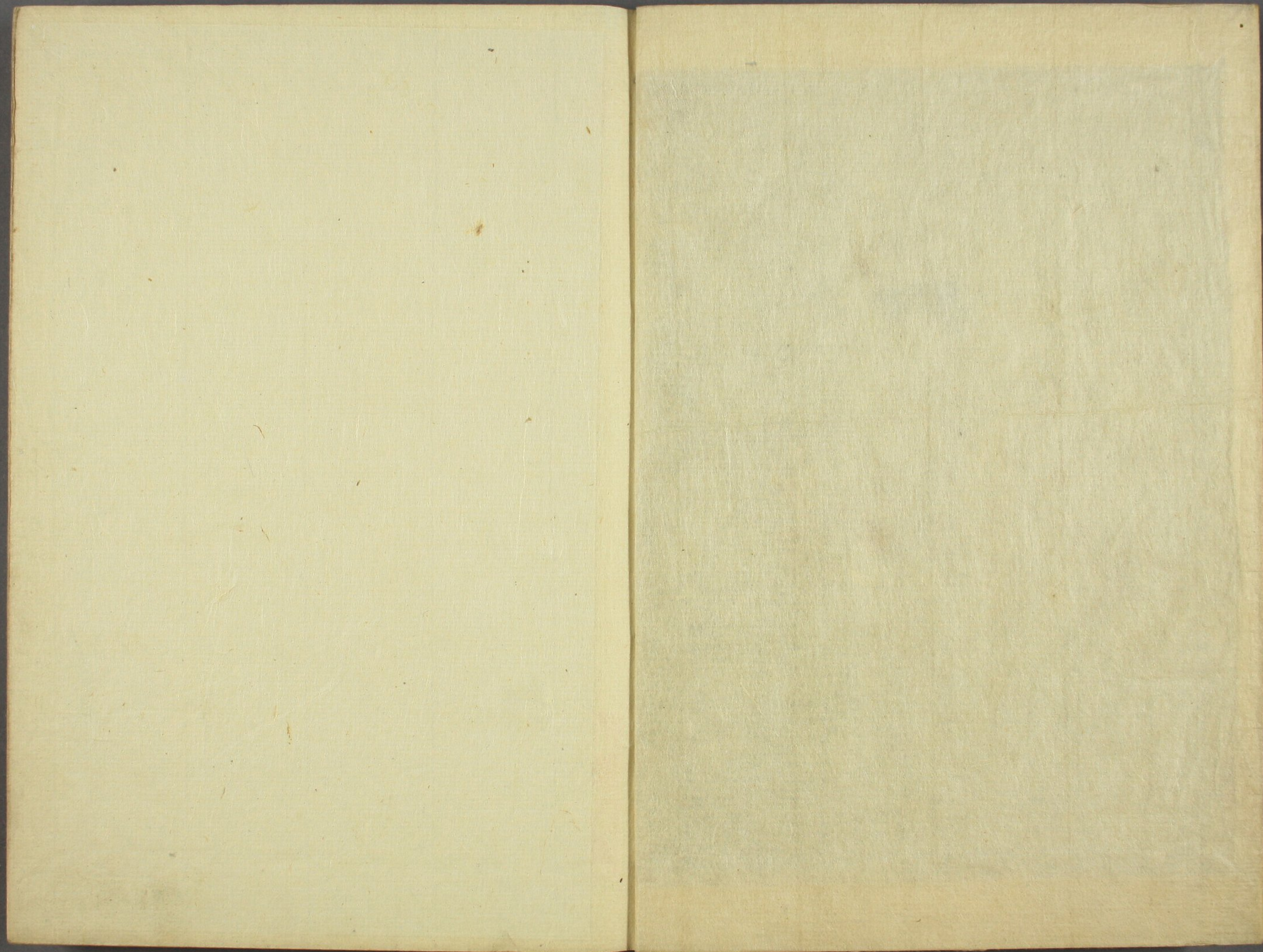




源氏物語







若葉の初花尋子て雪を色に染めとて下氷の
 源とて色をく波鼓を舞にふらふとて早の土を
 流るる人てはなほ思ふはなほ思ふはなほ思ふは
 何とてはなほ思ふはなほ思ふはなほ思ふは
 花鳥の啼きを聴きてはなほ思ふはなほ思ふは
 流るる人てはなほ思ふはなほ思ふはなほ思ふは
 比をくはなほ思ふはなほ思ふはなほ思ふは
 高の程人てはなほ思ふはなほ思ふはなほ思ふは



飛名ありあし〜海なる公林と海と〜
寄心はるは此物洛陽又男女の情と〜
又偏のるとは〜言はれぬと〜
止親玄義の海と〜
ふ〜
と〜
の海と〜
秘事傳授の出来〜

月日先んた〜
き〜
あ〜
詞の集と〜
の〜
あ〜
此文〜
〜

ぬく〜
 ちき盤お仕の男少く標標の
 濱庇之〜
 ぬゆの道さしは初学の〜
 夢の浮橋を渡した〜
 夏もれぬ〜
 菊とり〜
 志乃小定の下に〜

藤本信定書

源語忍草卷之一

目錄

- | | |
|-----|-----|
| 桐壺 | 帚木 |
| 空蟬 | 夕顔 |
| 若紫 | 末摘花 |
| 紅葉賀 | 花乃宴 |
| 葵 | 柳 |
| 花散里 | 須磨 |
| 明石 | |

きりしはな

比佐連の清時よしみの女清更衣よしみありてゆきゆきと給ひ給
 ひ事秋中ふやむとてなすき記とふありねがすて
 ころもたも給ふと巻まきふ書しよの相あひ意いの更衣あり此
 人だんも大納言おののこのむとてえたり父大納言とてくう路
 給ふり此更衣ありけすてまをゆゆの子ねと
 けまの帝みかどふまをたばふつひなもとてまをひま
 給ふひまんひまをたうくありきまもとてまをひまとして清衣
 給ふりしと出路と父大納言遺言ゆいごんをまの母君とて
 志しまの清衣給ふるゆきゆきと給ふまみのみとて清衣しよと

くるくひなく汚穢をたつめあひべとくふらつて弘徽殿
 の女御すまひをたつめ何やうこの女御を更衣とせぬと給ひて
 くる祿くしと事をも教給へば此弘徽殿といふ右大臣の
 出じとめあひの人よりせられまつりあひて給はせゆと
 つの言出集とせあへば朱雀惟情よせいなると也此弘徽殿といふ帝
 とく様さむらひせ多くい傳して更衣の公うらうりぬれとて
 思ひてどのほの病なまありあつとみといひと衣おれふ
 思おもはせゆとてんそゆのおのこみと生れあつと書し源氏
 あり此君三のよ成ありなる源母更衣の日の病なまゆ
 その限くぎりゆるとゆふとあつていひとまうしてとていひとあつ

給ふ帝みつと名祿おしませ給ひくとゆくのちとて
 ぬこもとせけとて更衣

かのりとも別わかるるの世といひゆりこの命のちと
 とらみあふと家きやまの宣旨せんじうと下とせこの車のちとてひく
 衣えの肉をゆる也馳ちをうねがととてそのちとてと
 ゆふとせあふと源氏をた肉妻にくまはと玉をりて更衣つると
 出まひつとくと汚穢つひせむすめと夜半よはんをさうとまはりぬく
 なるも給ふと汚穢の帰かへり来と奏守そうしゅ聞きふと汚穢つひせむ
 何事なニも思おもふと汚穢つひせむと源氏も汚穢つひせむ
 おもひとてい出し給ひと更衣の母君あかも給ふ賜あづかる

号に^{更衣}いふ三位の内々^位なるをけつひと帝^{こうに}清^{きよ}をげと
けつひの^{たれ}あきてありくさせ給中風ありくさく
吹^{たく}夕^{くれ}言^なふ^や教^{しゅ}員^{ぎん}の^{めい}命^{みこと}婦^{むすめ}といふ女^をを更衣^のの母^{はは}君^{きみ}の^{みこと}
清^{きよ}伎^ぎの^まはつと^をけつ^ぎ制^{せい}衣^い

之^の味^{あじ}の^こ露^{つゆ}吹^ふむす風^{のかぜ}の^まき^こ小^こ萩^{かぎ}の^もも^を思^{おも}ひ^しも^をれ
命^の婦^の母^の君^のといふ^をけつ^ぎと^を源^の氏^のの^み清^{きよ}横^{よこ}辨^{べん}と^をく^を見^みて^け帰^{かへ}
る^を更^{さら}衣^いの^まふ^をま^をひ^を梯^{はし}箱^{ばこ}と^をめ^をく^をこ^をも^を母^の君^の命^の
婦^のと^をま^をの^をみ^をま^を長^{のちが}恨^ご歌^かの^を給^{たま}ひ^を双^の紙^しを^を清^{きよ}洗^{せん}して^を貴^の妃^ひの
別^{わか}遣^つと^を悲^{かな}し^とあり^をひ^を一^の玄^の宗^{そう}の^をお^をが^を紀^の子^こ引^ひく^をべ^をいと^を清^{きよ}洗^{せん}
と^をれ^をめ^をも^を命^の婦^の母^の君^のの^を清^{きよ}洗^{せん}と^をま^をる^を清^{きよ}洗^{せん}す^をま^を

あ^の風^{かぜ}を^をど^をか^をの^をう^をけ^をり^を小^の萩^{かぎ}の^もも^を志^のぶ^をふ^をあ^をこ
命^の婦^のも^をも^をま^をも^をひ^を一^の手^の具^ぐな^をと^を清^{きよ}洗^{せん}せ^をま^をま^をひ^を
方^の士^しが^をあ^をこ^を人^のの^をあ^をま^をる^を存^の存^の多^たふ^をあ^をく^をあ^をり^をま^をる^を
か^のん^をど^を一^のあ^をこ^をひ^をり^を小^の萩^{かぎ}の^もも^をか^のん^をと^をえ^をと^をあ^をひ^をて^をま^をも
存^の存^のゆ^をく^をま^をら^をん^をも^を存^の存^のは^をて^をま^をも^をま^をの^をあ^をの^をま^をと^をま^をる^をま^をる^を
と^をい^をず^をと^をあ^をを^を給^{たま}ひ^をす^をま^をる^を清^{きよ}洗^{せん}と^をあ^をこ^をと^を源^の氏^の因^の裏^らへ^を帰^{かへ}ら^をま^をる^を
年^の月^づ言^のら^をま^をる^をま^をる^をに^を此^の世^よの^を人^のと^をも^をみ^をま^をる^を守^の美^み一^のく^を生^のひ^をま^を
給^{たま}ふ^をせ^をの^をま^をり^をあ^をこ^を文^のと^をめ^をを^をま^をる^を給^{たま}ふ^を何^の事^{もの}も^をま^を
あ^をく^をお^をり^をて^を琴^の笛^{ふエ}の^を給^{たま}ふ^をも^を雲^のを^をま^をる^をを^をあ^をる^をか^を一^のま^をる^を
そ^の以^の唐^の去^りより^を相^の人^{をと}ま^をる^をす^をふ^をま^をら^を源^の氏^のの^を相^{をと}ま^をる^を

させあふ。唯人をしてねがやけの清後見をさせたまふ。天下をのぞくおとと奏しけしむと申すおととねがと。相入源氏の清のちを多て。光る君と号しけり。年月ゆきと更衣の事わとれさせ給ひて。似つるものもや。源氏をせ給ふ。先帝の四の宮似させまふと。内侍の典侍といふ女房奏しけしむの清兄のま都那のまふねがをて。入内をさせ給ひて。藤壺の女清といふ申あやし記す。更衣の似させ給へと。清を毛耐むやうにねがす。此女清を。推しよりの源氏清をよけ給へと。源氏十二と清元服あり。源氏の姓を給へと。只一人の成あひ中將ふさせ給ふ。清元服の時。清急は親し。左大臣を百す。よのねがは。水ののり。帝の清妹なり。此清よとに源氏の少將といふ男子ひとり。姫君ひとり。源氏を源氏のよの方。みとの給てよと。清急も。元服の夜。左大臣の清許。源氏わたり。特あつと。此姫君を藤壺のよといふ。源よ。後身なり。歳十六。よと源よ。四の清あ。源氏なり。此清急と。二條の院といふ。内侍の相。藤壺にねがす。此巻。源氏誕生より。十四。あつと。事みえたり。

はつとと

五月。雨の時。同を記す。内侍の清。お急。お後。よと。源中將

治めてさうひさふ源清盛とさうく右大臣の公達頼朝の
 中將まじり孫ふ相益よ花入の女將とひひ一人あり暮方の
 上の侍兄あり右大臣の侍聲あま弘徽殿の妹聲あり
 源の侍あまあま後身又小舅あり侍の仲間うくして何
 事もひくさびひひひひ孫ふ曰書七書とも見えはるめて
 う好むりあまもあまうとてさうこれの孫ふあまの
 馬の改辰式部の悪もまりて女の品類を上中下ふ
 りつりてその能う器物繪師のかけ後あまあまうて
 侍あまあまひひひひひを雨夜のあまうとてひひ侍まじり
 侍とて馬乃改わらふし女の事と侍う若も時を夜と

思ふ女侍まじり孫あまのうくもあまう侍まじり侍まじりあま
 思ひ上りあま何事よはまもても侍まじりあまううう
 多うの孫まじり本妻まじり侍まじりうう姑婦うてゆき
 水く常に能侍まじりあまううううううううううううううううう
 とうん事のえせう此公のまじりあまひ侍まじり侍まじり
 ねもまじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍
 手と引まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍
 けうう限まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍
 手と引まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍
 とううまじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍まじり侍

いげまごぞとる縁ありどよまの松わらうよりみまのいざなひにおまの智ち
あすゑの子とも。此伊豫介の女房の右衛門督として中納言
わけ兼あまの娘あり。言はれも出さしと思ひし。むぐ二親なごも
とりのありまの見はげふおやもれくしてのくひひの
外なる伊豫介の海へけりて居るあり姉を便たづねせり
伊豫介が方ふあるまの。伊豫介が後陣あきらの女むすめとて
紀伊ちごりませめにして。継母あり。此女と空輝うつせきといふ夜更ねれ
姉—給しどいより時ときの流ながるをよめてとて。孫ねれ給し縁ゆかりを
記出おきだす。鬼おに角かく志して物もののころやせ—お入いる。空輝うつせきといふ
ね—いざなひ—あまのいづもにむはまあして。あまのいづも

ふまのいづも—給しひひの。給しよるまをいす。伊公—のいづもを
空輝うつせきの申す童を。時ときを給し文の流ながるをけりひひのあり
あふめて。いづまのしと。流ながるあふ。あまのいづも—給しよるまを
海うみのあふ。水みづの bodies もあふ—と。あまのいづもを。後あともあふ
給しよるまのいづも。水みづの面目めんめいと。給しよるま。空輝うつせきあり。お
いづまの海うみを。いづまの海うみを。給しよるまのいづも。あふひひのいづも
は—いづまの海うみを。いづまの海うみを。給しよるまのいづも。あふひひのいづも
海うみのあふ—いづまの海うみを
数かずのあふ。いづまの海うみを。いづまの海うみを。いづまの海うみを。いづまの海うみを
いづまの海うみを

空蟬

寝られ給ふぬまにと書出—けるにんてまの歌を
 よみあり—其の事おのりきく—の給ひきく清信を
 けりひ給ふらひせむり者をい小君とらふ御事は何とぞ
 たごらうそて引合まよとふらひきくぞけりおひまの
 ぞとねもつ子紀伊もも國ふらうらむづらむお事よ
 ひまといひひある女言ふらうの車は源をけきまのり小君を
 おきく空蟬のり源をのり車に並むる小君
 ぞらう肉入らむまお婦のらけむの西の序のり
 寝娘まきむすめの萩はぎとら申まをと其名なを申まをく長源車ながねんぐるまのりおらと格子こうしの

ともふらうそてねまにと寝れ空蟬が歌をよみまのり
 ねまにとていけくもらけくのびひまのりまのり悪あく一いつは
 よらねまにまのりてけらうて清目しみよめるをら—をゆふ
 寝娘ねむめの歌のり寝母ねぼより海うみ—ままどそそけら—あ—其名なも
 よら親おや子こ一いつはよ姉あね小君こきみ妹いもうと—て源げんを引ひ入いる娘むすめの着き
 何なにもあけまのりよ—孫まご入いぬ空蟬うつせみのまゆ—おのひ礼れいまのり孫まご
 光ひかりのらみまのりおとま付つてそとねま出いでくれぬ源げんよとま
 ふ—まもとねま—まあ人ひとどらぬ人ひとあひ娘むすめの思おもひのたねど
 あとれ海うみらふ人ひとあくとおまのり却かえてあ—けまを誰たれ
 清公しみこうぞ—おらにのりひ給ひて蟬せみのまぬけたるまらふ

空輝の娘をよむたてし一為家とて帰るはひしてまほし
よみくはりのつる源

空輝の娘をよむたてし一為家とて帰るはひしてまほし
源のつる

ははせよみくはりのつる源のつるよみくはりのつる
と伊勢が家の集りある歌を書きしなり新しきよみくはり
よみくはりのつる源のつるよみくはりのつる

夕かた

桐壺の帝は清貴春言とてつれとせまひしとせんと
前坊

と一奉らるる清息不ひめをよむるつるよみくはりのつる
あまの糸よはるるつる源のつるよみくはりのつる
清志のびあつるつる源のつるよみくはりのつる
大武の乳母といふ此乳母の子を惟光といふ源の清公とい
めてお母守るはふ此をよむとつるつる源のつるよみくはりのつる
はあつる源のつるよみくはりのつる
大路の車まきく見まはるつる源のつるよみくはりのつる
あつるつる源のつるよみくはりのつる
あつるつる源のつるよみくはりのつる
あつるつる源のつるよみくはりのつる

わくしき事とせり人など女はなまはる花をよとていへんおふ
けしにすげの因すげのすげ白すげの扇すげと持ておふ人おふのきて
よるし給へて海舟ふしそせわねど花よのきて帰る源を
まねておびるおびるして還り給ふて立出ぬおひり
惟光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん
そりたる扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
ふたぬさねにまひりていへん惟光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
わくしき事とせり人など女はなまはる花をよとていへんおふ

ふあてふおひりていへん白露の光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
と書と書ひりていへんおひりていへんおひりていへん源

よるし給へて海舟ふしそせわねど花よのきて帰る源を
まねておびるおびるして還り給ふて立出ぬおひり
惟光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
ふたぬさねにまひりていへん惟光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
わくしき事とせり人など女はなまはる花をよとていへんおふ
けしにすげの因すげのすげ白すげの扇すげと持ておふ人おふのきて
よるし給へて海舟ふしそせわねど花よのきて帰る源を
まねておびるおびるして還り給ふて立出ぬおひり
惟光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
ふたぬさねにまひりていへん惟光たれ扇ふたぬさねをててまひる人おひりていへん書
わくしき事とせり人など女はなまはる花をよとていへんおふ

後よりいへばおきしつもの思ふまゝにしてすゝ海
人百すゝと清きとせりたふど山にこりていふまゝ
おもれもなり一右刀をぬきて枕におもふ至源立出給ひて
るどそりおとせりし出ぬもせめて見ゆべし
みえ一女の面影をと思へてうせぬ夕白を引とどし
給くとおれりてして身もひえ息も終とてまゝ今
すゝまゝのいおきもれと惟光夕白の死骸をうと送
お一包車ふのせ我道はまの尾東山ふありけし
不人ほりてお源と市馬あきぬぬらんと急と三
へ御のあき若生のつとせりて一日のそりてあき十八日の

日々白の葬禮一けり源と嘆氣といはれり
給つと右道とを百ありてつひ給ふいふ成人とてあき
君孫あつと三位の中將の清娘とてけり親達いふ
成あひておすつおとておとせりと預中お清うべ
おが一けりて北の方ありて給ひて人ばてふとておと
ろしげあき事とせりてあきとあきとあひて西の方
乳母のあきおとておとせりとせりておとせりと
ふとておとせりとせりとせりとせりとせりとせりと
おとておとせりとせりとせりとせりとせりとせりと
おとておとせりとせりとせりとせりとせりとせりと
おとておとせりとせりとせりとせりとせりとせりと
おとておとせりとせりとせりとせりとせりとせりと

かしら申すの御事一入りの事などいふ事なれども
 れどもあつた事なれどもと尋ね給ふ事いふ事あり給ふ事
 ひとまはさる事といふ事は遠くはなれども空蟬をよも
 秋ふらぬ伊豫の介も夏伊豫より登るもぬ空蟬の巻
 入きかえしてと申す事いふ事なり西の序よりいふ事
 のみへ娘ふ少納といふ事上人を聲ふ事いふ事と源
 定より少納よりあやして思ひ出さる事いふ事と女のを止
 おおがして我なる事と申す事いふ事西の序の事いふ事
 是らといふ事

おれつたを新がの藤と申す事いふ事いふ事

此序の事いふ事は女を新がの藤といふ源の事いふ事
 是らといふ事の内事の事いふ事と申す事いふ事と申す事
 よもも空蟬といふ事いふ事と申す事いふ事と申す事
 小伊豫の介團へつらばぬ事いふ事と申す事いふ事と申す事
 女魚の事いふ事いふ事空蟬といふ事と申す事いふ事
 ほかにも申すに揚扇をよもと申す事いふ事と申す事いふ事
 お娘をよもと申す事いふ事と申す事いふ事と申す事
 申す事いふ事と申す事

あつた事なれどもいふ事と申す事いふ事と申す事
 申す事いふ事と申す事

若むらじ記

源おらりまを頼ひ給ひてさう療治させ給ふと知りず
 北山小寺の聖徳太子の呪咀をせぬと或人等
 一ひびきふほりて手に先びゆりてむらじの外に出ん
 きてまらびばさぶおのちをせんとして清徳の人を
 四入るは道志のひそくあつはをねてして聖子對面を
 申ふとせぬ清徳をりて給ふとて人々の對
 面をすふおのち入道の娘かゞげくつるを給ひて
 立出てさうのちとて給ふ小柴垣とて面白うしてさうげある

若むらじの母ひびきの妻子の傍都のふなり。つとむなと
 出入あそぶ女もふも教ふとてさうせぬと夕言のちふ
 惟光さうり清徳とて柴垣より給ふとて早のち
 尾昭息の上経をよみておやまげは清徳の給ふげある
 女二人さうりおとつるを出入給ふとて申ふ十げりあるや
 あらひとさうのちとて給ふとてありの教ふとてさうを
 ひろげあらしとて教ふとてあらしとてさうを給ふ
 免れとめさたる人河事と腹立給ふとてさうを
 いちつとて童女のさうとてさうとてあらしとてさうを
 若むらじの母あそぶ女もふとてさうを誰かんとてさうを

そを更部じりとの弟子の僧部源を日が坊へ入水物語など
志まはるゝに、よゝふ住あみ誰人ぞと僧部小孫孫あま
まふ住る尾と私おせりの妹按察大納言の後家よ住る娘を人
そり住るに玄部那の言ひ孫ひと娘をよと出さす
し、おぢがむねく娘と、のりく成住るゝとては孫を言ひし言
歌を住るほよふを恨まゝ成て新屋のあふふよふ
住住ると語ふは母と紫の上と清父玄部那の言とあまの
よ兄弟も也蘇つたのあまふ紫の上と娘也と進まゝとらふ
まゝも理直進まゝとて、おひまゝのまゝとらふ
おせんとはがしして尾末あも對面をよとて、おひまゝと
いふとたゝとひ合意し孫を守女の事と紫と教へよむ
又物のゆるま紫のゆるまとい申古今の教ふ

紫の上と由ふむと、おく村とみあづとあま進まゝとらふ
と何うはるゝおはるのゆるまお進まゝとらふ、とて源
よふ揃とて、おひまゝ紫の孫あまのむすむすのあま
とよふあひ、よゝふ紫の上といふを、おはるあまのあまの孫
おし、おしと出あふ、おし、おしとあまのあまのあまのあま
おし、おしとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
おし、おしとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
おし、おしとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
おし、おしとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
おし、おしとあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

祖母おばもあやゆあやゆとさおもく成なる終はつふま終はつ入いりむむむむむむのささ。
ままれれととづづるると後見うしろみああして京きやうの家いへふ海うみままて居ゐるると河父かふち
まま部ぶ那なのまま味あじととののああままをを受うけけひひて源氏父げんじちち宮みや入いりり
終はつふふ何なにとといいむむののいいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
ああててのの父ちち宮みや入いりりとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
車くるまふふちちままををて海うみののああままののままををとといいふふとといいふふ
とといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
とといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
須すとと海うみ娘むすめののままににいいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
習ならふふとと教しへへるる源げん

終はつふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
とと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひ
恥はぢぢののままををとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ

ああののいいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
とと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひとと書かけけひひ

はは巻まふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ

末法心苑

源げんののああののままををとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ

のきつもの如く—昔賢の系そののいゝあがり何ふのふふ
遠きあつくと悔—と歎くあきとほほめたりと我あ
てと誰う見えのぞんかろくふ目重なる位吾も何とれふ
いと成—けさの指後など多くはつとそれおのいひ
念はふとごころと終く更源遠あひく思ひの外をふ清
のこりおまが悔—とてとあふ書終るまで

あつものまきとまおしよ何うは末摘花と袖よ袖は
すはむ花とてふふの事おは歌より此婚君を
まつむ花とふ或時源よの末摘より袖のあひて紫のよと
おひふあそびおご—終ふとて源の歩を果のさ地り

紅粉を赤くけくみき終るど紫のうい—とくあひ
あひと深はんとあやうのあて拭ひあひ平中を
彩そくあふ赤の—とととてあひあひ
平らうといふ人女と—ふ何とれと泣作とて又す
視り水を目ふ塗つとて—あ—けと女と—をたてて水
のり中へ墨と摺入く—と平らう—あもたて
目ふ付たはと教うり墨ふたすそ時女平らう—と
をるんせ

我ふこほ—記ふかあまどくふす—と款の—
とらみ—とたのむ—とたのふと—と女と—と—と

露も志くせ給へて清年もよきせありし一は孫まご一とて
 清氣ちやうあひをいざりしは源の清なりふすし一もたづひ給へ
 孫を清母翁はがひ人やあや一とて思ふんとくも一は
 孫ひと彩り又此巻ふ源内侍也といひきくまは年五
 七八の氣仕きやうじんの人あり年母のけきとすともそのあきくは
 けふ人ま一源もきくまは思ひて或時ありて孫を改め
 中將は孫ひきく人の事をもと記あり源のめり清公せり
 源内侍ら改の中將は何めとれあやとて思ふ入すして源公
 ひくもあくしはどして是歌とせんと思ふして婦あり
 屏風びやうぶのそと人怒いかまきけ一記して中將おりたまは内侍ら

常ふひのりすもれは修理すいじのたまひしふあり源のそれと
 思ひてそと起おこて屏風の陰かげのくま中將のけははあり
 ていふもそとあ一古刀ことうとぬけの肉付にくづきとて指さしておひりて
 きてるといふをうりたまふ中將孫へ一めねて笑ひたまふ
 源の中將のきぶかりてつくはるぞと志の孫の屏風のし
 ろうり出でて太刀持たちもち一とて思ふて古刀とてその笑ひて
 志あり是より中將もすれは是事このことはありて源をせし
 孫ひ也相益あひえきの帝みかど進すすまふ清くくめと春宮はるみやう子こ讓やう里
 ねりせ給へんと思ひて春宮とていふつがの巻よ一の言と
 何事なにごと一弘徽殿こうきでんの清ちやうとて思ふあり春宮はるみやう帝みかどふありせ

終り沙紅羅の春宮より後迄不の由と云は若くは若くと
 思召弘徽殿の御父右大臣あてつらん應之御進言をせねと
 後臺の先帝の御あてもとうりの御位もきけと
 此りしるも志の御あてと流つらん新もとうりて中宮あ
 へもせよ中宮右大臣御進言弘徽殿よりまづ
 先帝の御あてに御あてよ後迄不はあてられ
 終り人弘徽殿より後迄不はあてられ終り也

花の宴

二月廿日何より南殿の御進言あてられ花見の御遊びのり

題を下され親王達公卿侍をゆくも終り去年の十月
 紅葉の御進言の時深き青海波舞ありねと云はるを
 春よりして進言せ終りてせんとあてられ御進言の
 中柳花苑より御進言とねと云はる御進言の御進言
 所衣をねとて揚りて其源より御進言と云はる御進言
 後臺の御進言と云はる御進言の御進言の御進言
 されけ進言より御進言と云はる御進言の御進言
 以不と進言御進言の御進言の御進言の御進言
 かりと進言御進言の御進言の御進言の御進言
 神をさして引す御進言の御進言の御進言の御進言

の終ふべきと源と愛慕の思をわきまにせしむるに
み誰人ぞ名残り終へ今づるまにそ終ひといひりばいさめて
多終ありと

う紀身ふむとて清かたむねても草の原とてこのよき
は方のところの源由をぞしほくのはけりおくまうし堀よ
きつ終ありんしゆして名のいづをもたづみ終りて心あり
源の魚一源

いづ道ぞと露のやどりととせけんまた小菖があそ風もそゆけ
とよみて河つらと遊ふたれがわくまに扇をさめとく
別道あり此女君と春宮の弟母弘徽殿の女弟の弟妹

六の君といふそねを春宮の女弟よとあそせんととて
は苑の宴に群と見ゆ物のあめととより市婦の弘徽殿へ
おとせし終りねがろ月よふとく物のなるといはずとひたま
ひの終恒を詠よとるもせびくありもとてぬ表の表は
統月おふとく物の終りととよみしあといはずとひ終りて也
後子春宮よとるの終ひ肉体よ成るの統月おの尚侍とてふ
かくて源の此女の終つておはけり終りて惟光良清といふ
弟家人を肉裏に北の陣よつけてまふ弘徽殿よりとて人
物と車はくばいづくへゆきとほをてよく見ると力終ふ
ゆりの終りのつとゆりて人をつけくみせしと弘徽殿

よるの車右大臣へありしとて源へそくし中御弘徽
 殺の所妹なるを母し一清母よりはかたき衣とてあつと給ひ
 然るにそく源へも弘徽敬言ふのうも思ひぬし事歌れ
 ちよといと安のしとあつとあつと又も思ひしと山ふ
 明る二月すし右大臣の庭は花盛るは弘徽敬も
 姫君達の道なまして花見ふとて入あふ源も思ひぬ
 と糸の絲入りのが統月東も姫君達の清傍ふとていぬぬ
 いふみしてあつとあつとあつと川へ海へふあつとあつと
 道してあつとあつとあつと権言樂と御ひあつとあつと
 所簾の内ふあつとあつとあつとあつとあつとあつと源

梓弓あづまいさむらふまよわき母のみし月つきの影かげや見あきと
 とふみあつとあつとあつとあつとあつとあつと

かいふあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 とふみあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 神代かみよのうたひもあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 人ひとのうたひもあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あふひ

桐きりぎりすは不ふ帝てい所ところ位ゐを春はるふふ讓ゆづ里さとあふ所ところ即すなは位ゐの儀ぎ式しきの

巻ふのみえ移ど世の中の時りてより物うくことまじふ
書かしたまはばいねより春宮と帝と中なる相違のみと
との此巻うりの院と中彩の春宮ふの最後はこれ清とこれ
若宮をすゑとせ給ひて清と一なり源とあせあつり
源は巻ふの大將たるのみこの清母弘徽殿后ふと里あふ
清代びよりみと伊勢の母宮たりとせあひて又新とまを
とすゑあつ法とれば此清代ふの茶坊の清娘六条の
清息所の中とこれ娘君を母宮ふとあまかき養の母院も
おのあふ弘徽殿の中とこれ女三の宮と母院ふとあまふ
源の中とこれ伊勢の祓宮の代びよりと

賀茂ののそ身ふいとわらふ時とる四月ふ賀茂の祭りの
そ時毎院ふとせあつを源も勅授めて清佐ありそれ
み付今年の祭の儀式とるよりましくより見物あふ
郊の貴族といふおのり守隣の園とる女子と引つ連
群集す源のあふといふ夢はとるわとこれ清母のそも勅
とく志あふ人種ふ只あふぬ清母はとるまやまうとるあふ
あふとようし給ど母房達見とるたまうとるすゑとる
清母とあふ宮とあふ大とやとるわとるわあふとあふ
あふ目と物とあふとあふとあひて清とあふあふ
日さけとる清車とあふとあふとあふと源のあふあふ

人のそと通しなる物見車まを中細代にあげらの少女すい
 きつ二の何の扱かたしやんとすれとこれの華かの御車に
 何いと情強じやうじやうくて勅しやくうすはまの六条の御息所みせの車也
 物見もどし記したくとあふま出たりの夢あゆみたところを御息所
 とも忘わすれせ給たまひ給たまひ侍まじたの能うたきと源げんと密通みつと
 あるあくとあふまをせあふまをてなう。めらおみはたおみを
 何いとと思おもひて是非ぜいひをいふせ給たまひ後のつて人ひと押おしやる車くるまの
 轅うづもあふまをひて車くるまをたする物ものもわしひことたれが
 軀みづもあふまをひて車くるまをたする物ものもわしひことたれが
 軀みづもあふまをひて車くるまをたする物ものもわしひことたれが
 軀みづもあふまをひて車くるまをたする物ものもわしひことたれが

院いん一いちと事ことと思おもひ集あつめあひて御息所

のがよのこみし川のよをいふはあつらふはあつらふはあつらふ
 日ひのりふとあつらふはあつらふはあつらふはあつらふはあつらふ
 の日ひのりふとあつらふはあつらふはあつらふはあつらふはあつらふ
 御息所一いちと事ことと思おもひ集あつめあひて御息所
 車くるまにこ見物けんぶつふゆんとし給たまふ侍まじたの上うへに巻まきふ十じゆ四しの何い
 種たぐひを肉にくの物ものの分ぶんを分ぶんておとすねとあふまをひては給たまふ
 かし。髪かみをよめりふゆああり今日けふより記し日ひのりこそ紫むらさのよの
 髪かみを源げんとあつらふはあつらふはあつらふはあつらふはあつらふ
 とうらおとあつらふはあつらふはあつらふはあつらふはあつらふ

源の御一むしりたのり

ふひろいふひろいふひろいふひろいふひろい
満平と源のけけけけ

さく車ふあひのりてふありに出あひふまゝふふふ

あふ女車ふのり扇をかして源の御供の人を招ふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

扇をかきふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ

源の御一むしりたのり

八十氏
あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

かきとねふありしけりともねも泣きあひて

ねがもつがふれも泣きあひてつらとむらびとあふたつる

とよもねふもつらとむらびとあふたつる

ねがもつがふれも泣きあひてつらとむらびとあふたつる

生れまじり後壽ひうえたきとねがもつがふれも泣きあひて

かきとねふありしけりともねも泣きあひて

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

際目つらとむらびとあふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

あくねふ若君あふたつるつらとむらびとあふたつる

思ひ一事のあふとらねしうねがすまは内思ひのまをびり便
 たりとほあまの唯二条院ふりてわたり一海して紫の上と基ご
 打篇はとてとて抱ひ終ふ或は紫の上と新梳一終ひて
 源惟光ととてくひとの表のやうに教へて何とてわらひと
 系とせよと何とてあまを惟光ととてとてのこめて
 祝言何の〜とてとていふより。ねの〜とていふより。ははははは
 け〜とてとてとていふより。〜とていふより。の〜とていふより
 主ぬ此のいふとてとて源氏と部の中は二々の大事のひと
 つたり。〜とていふより。の〜とていふより。地棟の巻とていふ
 頼〜とていふより。〜とていふより。のよとていふより。〜とていふ
 せむとていふより。〜とていふより。今まての紫の上と兵部卿の
 の姫君とていふより。の中は〜とていふより。の〜とていふより。の
 せむとていふより。〜とていふより。の〜とていふより。の〜とていふ
 女の本が家来とていふより。〜とていふより。の〜とていふより。の〜とていふ
 なる〜とていふより。〜とていふより。の〜とていふより。の〜とていふ
 叙父を〜とていふより。〜とていふより。の〜とていふより。の〜とていふ
朝教 あまの下の無院とていふより。此巻の源氏母一夢の上の
 母六めて〜とていふより。〜とていふより。

乙女子がほふるもあつに林だの夢とあつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

あつしつゝいふ事とていふとこれ

の御極にうのろひも後臺の中宮の三條女御
 乃と給へり源も二條院へ引とておとん門の前も
 好くきりこみし出仕の人々馬車うけこきて番下
 なる物の貸もみ守此との物に貸三ヶは大事の
 一の也とある物の貸とす人の方の夜具の物入とて
 巧く貸也此由へふや今と大と給へ貸とぶんうろ
 といふ苑の宴の巻も源の逢あり一六の君帝へ奉りあひて
 自持の心にて女も夢の巻も聖義の祓院も立あり
 大后は内とりの女二の宮院の衣服めておのあふり
 源の御伯父式部卿の言に權の姫君すのり給ふは姫君

と源徳はなれ多う一はのえあふりわく祓院も女多ふり
 ねう思と眺目おの尚侍ふぬて内重に侍り給へ
 源も給へ御公ひりぬてそのおもと一げあり源の春宮の
 以後見たれば御母後法の中宮より給ふおのさあ
 御の御公とおもひてすれが恨も給ふより公より
 且びと思して危角もしてあまふりおの給へおのら
 けも給へ院の帝は給ふおのせあつておのれありとせ
 姫う思とふ今とりの事世もを建ふりおのり
 と給へ思とふ今とりの事世もを建ふりおのり
 へと給へ思とふ今とりの事世もを建ふりおのり

そのびゆ里あふそのおもしろく流流たれが秋の形も見えぬ
びくくを林院へ宿あり里母相法がのこす木の雲の
律師のよその宿あつる宿めて才ある法師とて集て論議
せし路をゆきふ此よの流流もそぐとみ後の世もたれ
けしお此流のくてもあるゆわくくおがけぬまぶ紫の
よの事ふよのくもてのり流流の肉重くまのあふを帝
流くくおがけして何のと流流のくくゆめえのくもせあふ流
月夜と絶ぬ流流もあふくく流流のくく公のくもせんふ
げぬくあふの流流の理りとおぼくしてとくめとせあふんそれ
よの春あふくまり流流の道あて大流の流流は納云の

顔の赤とく人白虹目を貫たり古子母りたりと口ずさむ
是の流の古子母が始皇子道々事といひて流流公あふ
やうにひひをせり流のあふとおぼせとてぬ流のくく
流くく流流の中あふ流の流流の流流をわぶとておが
あふのくく流流のくくあふとておぼくくおろくく流流
おろくく流流のくくすれとく判んをたぐく流流して切あふ是を
まげ尾といひその流流のくくあふ大うの流流のくくひそれと公
の肉のくくくくし流流くくくくくおがけん流
月夜といひあふをくくくくく流流の流流の流流のくくくく
とあふのくく人の流流のくくくく

おぼやけのうねりつけていそいそとつらつらとそとへいへいといふ

此世代の大后と伊父の右大臣つらつらと改と稱ひひも源氏

方にはいそいそとありす桐葉のまがた大后と稱ひひも源氏

とくにあそびありし源氏れが公よりいそいそと伊父の帝此

源をきくひなく山氣をいそいそと伊父の帝此

帝の存生のいそいそと伊父の帝此

一のまの伊代とれが何事もいそいそと稱ひひて日暮のいそ

とそとほくそいそいそ源の伊父右大臣の氣をいそいそと

伊父のいそいそと伊父の帝此

源を伊父いそいそと伊父の帝此

小舅頼の中將の大后の妹をいそいそと伊父の帝此

隔て公ねと頼の中將のいそいそと伊父の帝此

いそいそと伊父の帝此

いそいそと伊父の帝此

いそいそと伊父の帝此

いそいそと伊父の帝此

いそいそと伊父の帝此

いそいそと伊父の帝此

伊父右大臣の許すいそいそと伊父の帝此

たひ
よふかひのふゆふをればやめくもてあかしく源と對面し給ふ
たひ
度すも海に今記し給ふも多の事夏は事給ふ給ふ
たまふてのみありとほくをれはみまきとらへ人目志なく
源の給ふ給ふもやう給くて几帳の内ふの事と給ふ
志を衛月東の伊父右大長足ふおのりけうが源の事と
おがとらへと足ふひそのしうおぼ志とて大后の事と
志多へ病といふも給ひては病と成せんとおめ給ふ

けふち歌里

此巻の書出し一人志多ぬゆふにけうこれ物思のしとあふ

源の好色ゆふめくれ物思の給ふ給ふの書里藤景殿
女所といふ相益の帝は女所みく是も源の由緒母とを
ゆふ給うそ女所の市妹三の君とあふと源といふりて
物思のゆふみく是も此巻ふもと志とて此人の事といふ
志多とてや性年よりこのやう給う意を給ふとて書里
此三の君へ五月に時分源わつとあひま
おちと給の事とあはけりて郭云花あり屋とたづひてとあふ
志多とあひりて此女君とて花散置といふ

須磨

おぼろふくぬあはげをまの事行ろる所は清より人

まの清る所云傳こづてのそせあはぬとれあはるは不

みあはくはあはるのそせあはるのそせあはる

清より一原

別建後ダみあはるのそせあはるのそせあはる

おれより清みま渡へ清を給ひてそせあはるのそせあはる

いぶくたのあははげくおれ給ひてそせあはるのそせあはる

とそせあはるのそせあはる

あはるのそせあはるのそせあはるのそせあはる

あはるのそせあはるのそせあはるのそせあはる

とそせあはるのそせあはるのそせあはるのそせあはる

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

おれより清より一原

きてまはのよき千枝常則よりまほしきとてかめ茶会なる

ゆきれは精進より新ひをたせまきあふ海よりくはゆる都

ちふおとく釋迦牟尼佛の身子と名けりてゆるしめり経

よみあふとぬいとしめりよくあふし。唐のけしきゆてあふらふ

舟の棹のきふまぐらふとあふらふと海のこぼるるとあ

くしひあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

初唐のききとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

良清よりあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

和里右近のせしとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

紀伊のあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

あふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふとあふらふし

何事にもおぼしめし明石不司義里也唯事より上は娘とせら
 けり細合しと方より人々教多きとつんと有りかどお事公
 ありとて合点せば源の眞磨おとと海とをゆきとつて
 海へまゝんと女房おつのが磨くの由りぐましく持ひしを人
 みよとの市目とせしぬすも持れゆふ危途し終ふ人の此
 田舎ふとむ山嶽をゆきをゆき入ありん。のほろを流し入を
 舞ふまゝしん毛いしゆくし記事といふと入道殿ありて源の
 市母相益の更なる入道う伯父按察大納言の娘也とせり
 身とそそ新し高はふおしけ道が國王の市親をゆきしゆり
 罪ふありとて流し入る人の唐公も我初ふりきまゝし

何事にもおぼしめし明石不司義里也唯事より上は娘とせら
 けり細合しと方より人々教多きとつんと有りかどお事公
 ありとて合点せば源の眞磨おとと海とをゆきとつて
 海へまゝんと女房おつのが磨くの由りぐましく持ひしを人
 みよとの市目とせしぬすも持れゆふ危途し終ふ人の此
 田舎ふとむ山嶽をゆきをゆき入ありん。のほろを流し入を
 舞ふまゝしん毛いしゆくし記事といふと入道殿ありて源の
 市母相益の更なる入道う伯父按察大納言の娘也とせり
 身とそそ新し高はふおしけ道が國王の市親をゆきしゆり
 罪ふありとて流し入る人の唐公も我初ふりきまゝし

浦風やうらふうらうらひや神子ね〜波乃あそび
 伊伎さなるのりもねがしと遠く台家て京の事ども
 同より京も此面風きぶるふあびとて伊形ごも信る
 あどやひらび〜と海に伊伎の人〜佐吉の神ととあ
 ようばの神〜小雛をさめて祈らふいり〜雷鳴り車轉て
 源の山原の岡小橋〜楼小ねりき〜何づら〜楼を
 やけぬ上下もい〜び〜ありさ〜て何とれと〜ぐ〜をいあが
 墨摺き〜んや〜に〜日毛善ねが〜海どろ〜あ〜あふ
 伊父放院源の山傍小き〜せあひ〜外ど〜怪〜記不あやふ
 ともぞ佐吉の神ねる守〜と孫のよ〜や舟出〜て此浦ととれ

我も位ふは〜一時あやまの事いさ〜めどあ〜ゆし
 あるそ〜は〜^罪〜れ〜れ〜と海あ〜此岸小内裏ついで〜巻ん
 道と事何まぶ〜と〜とあひ〜と〜の是ぬをあつて〜名なの
 入道よ〜と〜人〜ま〜り〜い〜ね〜と〜は〜めり〜と〜あの
 若小つげ但まのせ伊い遠とひと〜と〜此〜源〜投露〜孫〜と〜小舟小
 人二三〜人の〜せ〜と〜せり伊父帝の〜此浦ととれと告あひよ
 かくまの告とて遠とひ小ま〜と〜何〜と〜此舟小〜と〜て
 明名〜と〜と〜あ〜入道源を〜と〜と〜先おと〜志わ〜建よ〜を
 延の〜と〜化〜して笑〜茶〜人〜先佐吉の神をね〜と〜公の〜限り
 こそ〜の〜が〜序ついでもや娘の事いひあ〜と持〜と〜は〜い〜と

けり或東原琴の音を聴き給へ入道新ひも忘るそ
 中へ入ふ事の思を居るの娘をば思部といふ事よあつこの
 別ふ任せける思部より琴を聴き置るをせ入道びよと弾く
 人に志やうが楓をせの思を居る中へ面白と遊遊ひ也
 原筆のよと流引よせて是の女の志をけぬひささるこそ
 ねとらうと物なれとけり又詞ふ事より娘の琴びりと弾く
 子を後見是と流へしよりおと頼ひと住吉の神あくれと
 給ひてけり酒麿へおとけりとねがえゆるなすどけりまぐ
 けり入道して入道

獨絲の君と志のぬやは流しと思ひけり此浦をびとま

とせせど水の流る一原

旅衣うりさきとたありの草の枕を思ふも猪むん
 果のあつ入道思ふ事の流く叶ふとせりて公のうりす
 志の思ふよ又の日娘のめと思ふ思部のりあつ入道も人
 志の思ふ思ふやとるを新居あれの思部へ新て思ふふあつと
 するぬ書さゆなれば娘の思と新しうて流返の事せん云
 思ひ入道ぞ思返一書てなるとなれば又の日せん宜音どが思ひ
 みなれぬとて又思はりとう思へば其時の娘思ひ一書一也
 せんどが思ひお月作を書の事思の思よの思く思ふ思
 思く一思ふ都思ひ三月十二日風強思く一思流又思院を

